



SAIHIKA 201503

SAIHIKA 201503

表紙：「覚晴」——鴛和	1
目次：SAIHIKA201503——矢野ヒカル	2
小説：永遠に続く白昼夢を——T.K	3
小説：星屑捕りと祝祭と——マウス	7
小説：たい焼き Twinkle☆Star——矢野ヒカル	12
From Writers——最低限の光	20

千里高校報道部45期同窓会「最低限の光」

月刊誌「SAIHIKA」は世界を侵略すべく生まれた、「最低限の光」の最初のプロジェクトである。

一、導入

燃え盛る炎、突入してくる銀色の騎士。煙に巻かれ朦朧とした意識の中で見たものは、斬りつけられ、血を迸らせながら倒れる両親の姿だった。そこで記憶はぶつとりと途切れ、死んだような時間がゆつくりと流れた。次に目を覚ましたのは、朽ちた家の中だった。

この夢を見ない夜はない。違う夢を見ているも最後には絶対にごうなる。まるで寝ている間にあの日を繰り返しているような感覚すらある。だから俺は布団から起き上がり、窓を開ける。ちようど朝日が昇ってくるところだ。あの時俺が目覚めたのは深夜だったのだから、今見ているこれは現実だと認識することができろ。

階段を降り、壁にかけてある籠を持ち、木戸を開けて外へ出た。人のよく通る、草が生えていない道を歩いて行く。しばらく行くと道はだんだん上りになって行き、やがて道と呼べるものは草木と同化してなくなった。

お世話になっている裏山だ。「ここは朝食の山菜を採るのが日課となっている。肉は滅多に食べないが、菜食主義者ではないつもりだ。というのも野菜を好んで食べているというわけではなく、動物を狩るには労力がかかり、それは手に入られる物とは必ずしも見合っているわけではないからだ。

つまるところ俺は経済面で非常に大きな問題を抱えており、明日の食事すら

ままならない状況だということだ。

いつものように山の中腹を巡り、落臺おちたいをはじめとして蕨わらびや夜衾草よびんそう、片栗かたくり、薇せみぎなどを採った。この時分に入ると暖かくなってきて登山もあまり苦ではなく、山菜も増えてと良いこと尽くめだ。つい十数日前までは比喩でなく死にそうだった。

陽もだんだんと高くなってきたので、眺めの良い場所で一息つくことにした。はじめてこの山に登った時見つけた場所で、遠くの方の集落まで見渡せる。そしてその向こうの大きな山の上には城のような建物が建っている。白い外壁に黒い三角屋根が続く中に、左右非対称かつ不規則に円錐の塔が突き出していたり、四角く窓が出ていたりする。外壁にたくさん窓がかるうじて見えるが、ここからは中を窺い知ることはできない。他にもいくつかの別館に分かれているはずだが、本館が大きいのでそれらはほとんど見えていない。周りは木々に囲われ、この時間には山の周囲に雲が立ち込めているので神秘的な光景が広がっている。

ただしあれは今は城ではなく、学校となっている。

この王国で最も格式の高い、王立結夜学校むすびよ。俺が全財産を投げ打って通っている学校だ。生徒のほとんどが貴族であり、俺のような天涯孤独の身分も知れないような人間は俺以外に誰一人としていない。極稀に優秀な人間が入学を許されることもあるが、最低でも中流階級だ。

ではなぜ俺がこの学校に入れたか。それは単にオヤッサンのおかげである。不意に後ろで土を踏む足音がして、俺は振り返った。

「また早朝からこんな辺鄙なところにいるのね」

風に靡く金色の髪。柔らかいその髪は水のように流れている。

「髪、随分短くしたんだな」

「ええ。こういうときに鬱陶しいから。父上には止められたけれど」

木々の葉が風にざわめく音にも負けない、はきとした声が響く。

彼女はこちらに早足で近づいてきて、非常に近い距離で俺の顔を覗きこんできた。背丈こそ小さいものの、鋭い目つきで眉一つ動かさない。高潔、気品、威厳。そういう言葉がよく似合う。綺麗で整った顔立ちがこんなにも近くにあるのに照れや恥じらいは一切感じさせず、ただ息を凝らすような庄倒感のみが伝わってくる。しかし彼女に見惚れる。さすが身分の高い人間は違つて言つてしまえばそれまでだが、俺がいつも感じるものは血筋ではなく彼女の人間性なのだろうと思う。

「また危険を犯して依頼を受けに行くのかしら？」

「そうじゃなきゃあんな額の学費払つてられねーよ」

「それくらい工面してあげると何度も言つているじゃない。出世払いが嫌なら昔みたいに私の家で働けばいいわ。父上が学校側に無理を言つてまで入学させた貴方に死なれるとどういふ評価をされるかわかるでしょう？ そうでなくとも生徒が依頼を受けるなんて前代未聞よ」

「正論だな。水風の言つ通りだ」

「……今回は通さないわよ」

「それは困る。村長に今日も頼むよつて言われてるんでな」

水風は俺の顔面に向けて固く握つた右手を突き出した。左手で受け止めようとしたが、俺の手に当たる前に見風は手を止め、後ろに跳んで距離をとつた。

なんでも学校の制服というものは日常生活でも着用しろつていふ暗黙の了解があるらしく、水風は制服の上にローブを羽織つていた。その緩やかな外衣の何

処に隠していたのか、水風は懐から水の入つた瓶を取り出した。

「今回こそは私の勝ちみたいね」

そう。これまで何度か戦い、まだ俺は負けていない。だがさすがに水風も敗北から学習しているらしく、殴りかかつたはいいものの拳を握られて逃げられず格闘戦を強いられ体格差から負けたとか、殴りかからず距離をとつてみたもののすぐ詰められて負けたとか、そんな阿呆のような負け方はしないようだ。

ここから水風の位置まで十歩くらいといったところか。もちろん身長が俺の胸のあたりまでしかないあいつがそんなに大きな跳躍ができるはずもない。会話が始まる前、もしくは会話の最中に予め何かを仕込んでいたようだ。

水風が瓶を逆さに向けるであろうその前に俺は背を向けて走りだした。後ろから素つ頓狂な声が聴こえるが気にすることはない。ただ全力で走つて、さつき見ていた景色に飛び込む。下は崖だ。だがそれほど高くはない。

落ちながら適当な枝を掴み、折りながら速さを緩め、最後にしなる枝を掴んで宙にぶら下がつた。見たところ地面までさほど距離はなかつたようだから着地した。

走りだす。水風はこの山の地理をさほど理解してはいないだろうから追つてくる可能性は低いだが、追いつかれると負けるので逃げる。

木々を縫い、背負つた籠の中の山菜が落ちないように根を飛び越え走つた。やむを得ず飛び降りたが今日の朝食は大丈夫だろうか。籠の中で引つかかつてくれていれはいいが……。

しばらく走っているとだんだん木々はなくなつていき、陽が完全に昇つた頃には目的地へ続く街道に着いた。流石にもう大丈夫だろう。上がった息を整えつつ街道を進んでいくと、後ろで足音がした。まさかと思ひ振り返ると、案の

定。既視感のある状況だった。

「逃さないわ。これまでは負けたから大人しくしてあげていただけ。逃げるなら追ってあげる。勝敗が決するまでね」

よく見ると微かに水風の息が上がっている。

「女の子にそこまで言わせちゃあ俺も正々堂々やるしかないみたいだな」

水風に向かって全力疾走する。何の小細工もない。ただ直進するだけ。水風はというと何の動きも見せず、直立しているだけ。

しかし距離が詰まってくると急激に強い向かい風が吹いた。あと三步というところだが、風に押されて俺の勢いが落ちる。水風は薄く笑って、余裕を持ってゆっくりとつつきの瓶を取り出し、木の栓をつまんだ。

「いつのか？」

俺は腰を落として前傾姿勢になり、極力風の抵抗を受けないようにし、思いっきり地面を蹴った。落ちていた勢いは元に戻り、目測どおり三步で水風のすぐ前の風が吹いていないところまで辿り着いた。

これには水風の引き締まった表情も崩れ、啞然としていた。俺が額にデコピンをしてやると、水風は片手で額を抑えつつこちらを睨みつけた。

「貴方、どんな筋力しているのよ。ありえないわ……！」

「というよりお前があまりにも貧弱すぎるだけじゃないのか」

「……成る程。あまり起らないことだから失念していたわ。『白屋夢』は相手が見るものではなく自分が見るもの。見させるのではただの幻惑。見るからこそ意味がある。何回も教わったはずなのに……」

「気を落とさなくてもいいんじゃないか。殺さないように手加減するというのが重い足枷だっただけだろう」

「それは貴方も同じでしょう。慰めはいらぬ。私は部屋にこもって夢日記を見返して手札を分析し直すことにするわ。貴重なアドバイス有難う。お礼に次は一步も動けないような体にしてあげるわ。じゃあまたね」

水風は早口でそう言い終わると、身を翻して足早に去っていった。帰り道はわかるのだろうか。あいつの場合飛ばばなんとかなるだろうから心配はいらないだろうが。

さて想定外に道草を食ってしまった。はやく依頼主の元に行かなくてはならない。学校のある山の麓には城下町が形成されており、そこには王国各地から様々な依頼が集まる依頼役場があるが、今回の依頼は俺が受けた中でも厳しい内容となっている。

依頼役場は公的機関であり、依頼を受けることのできる応諾者と呼ばれる人間は試験などを実施して実力と人間性を精査した上で選ばれる。依頼には一から十までの序列があり、応諾者は初めは一しか受けることは許されず、功績によつて序列が解放される。俺は五年かかってやつと六まで受けることが許されており、今回の依頼がまさにその六だ。

走り続けていると、家々が見えたところで遠くから何か妙な呻き声が聞こえてくる。獣のような、虫のさざめきのような、何とも不快な音だ。だが、何か生き物が発しているような感じがする。依頼と関係しているに違いない。妙な音は放つておいて、依頼主に詳細を聞くことにしよう。

さらに走り続けると、家が多くなってきた。道行く人もちらほらと見えるので、彼らに道を訪ね、依頼主の家を目指す。言われたとおり村の中を進んで行くと池のほとりの大きな家が目についた。聞いた通りの家の外見だ。瓦葺きの屋根で、俺の背丈ほどの生け垣で囲われている。街道のほうからは縁側が少

しだけ見える。これに違いない。

「ごめんください」

家に向かつて呼びかけると、少し経ってから引き戸が開いた。

「はい？ どちら様でしょうか」

「依頼承諾者の緩家です」

応対に出てきた奥さんの顔が明るくなった。

「ああよかった！ 来てくださったんですね。さあどうぞお上がりください」

生け垣の戸を開き、奥さんが招き入れてくれた。土間で履き物を脱ぎ、お邪魔する。来客室に通された。部屋の真ん中に机が置いてあり、その周りに座布団が置いてある。籠を降ろして適当に座って待っていると暑いお茶が運ばれた。奥さんも座り、話が始まる。

「どうぞ前置きは無しに本題を」

「ありがとうございます……依頼本文にも書かせていただいた通り、夢の魔物の討伐をしていただきたいのです」

「その魔物に問題がある、と」

「はい。実際に夢を見たのは息子でして、話を聞く限りでは人を百人食い殺したとかで……」

さつきは明るくなっていた奥さんの表情が再び曇る。

「それはまた厄介ですね。息子さんの話が例え大袈裟だったとしても本人が思うっている限り現実の魔物はそれ相応の強さになる。で、居場所の目星は付いているんでしょうか」

「それが……」この池の対岸の洞窟のようなんです」

奥さんは今にも泣き出しそうだ。人里近いところに序列六の魔物がいるとい

うのは朝ごはんを放つても今すぐに出発しなければまずい。

「最後にもう少しだけ聞かせてください。魔物の外見と、どうやって人を食い殺していましたか」

「ええと……虎の見た目で、それはもうただ単純に食い殺していたと」

「わかりました。昼過ぎまでに戻らなければ依頼役場に連絡してください。それとすみませんがこの籠は置いて行きます」

「わかりました、お預かりします。ではどうかお願い致します……」

奥さんは深々とお辞儀した。俺は立ち上がってお茶を飲み干し、すぐに玄関に戻り履き物を履いた。戸を開け、魔物退治に向かう。

一、完

○あとがき

復活の「X」第一弾。大学に入ってぐうたら過去の原稿を出していたが、弛んだ体にこの話は重い。この話というか冒頭の風景描写や人物描写が重い。一瞬で力尽きました。次回から本気出す。

しかし迷走迷走アンド迷走。まだ本題に一ミリも入っていない。魔物？ 話にはほとんど関係ねえよ。まあ第一章は魔物がラスボスでもいいんやけどね。そうすつともつと話が長くなるけどね。

四ページという体たらくですがお許しを。来月はもつとがんばります。

そして新たなスタートを切った最低限の光～SAHINKA～をよろしくお願います。ではまた来月。

星屑捕りと祝祭と

マウス

真つ暗な空に星が流れた。

直後、現場監督の怒号が響き渡る。

「北北東！ 貴様ら、もし取り損ねるようなことがあれば命はないと思え」

大気の中で燃え尽きることなく、かろうじて形を保った石ころが、地表に向かってぐんぐんと加速を続ける。

偶然その近くにいた私は、素早く石の落下ルートに接近した。棒の先端にネットを取り付けた網を振り、その石ころを回収する。網の中の石は人間の拳ぐらいの大ききで、未だ熱をもっていた。私はその石を腰につけた小袋に入れる。

私がそうしている間にも、次から次へと落下してくるそれらの群れを、数十人で包囲網を作り必死の思いで捕っていく。しばらくすると、後方から聞こえていた現場監督の声が収まった。一時休憩の合図だ。

張りつめていた緊張の糸がほぐれると、途端に全身を脱力が襲った。

その場にしばし漂う。またいつ次の群れが来るか分かったものではないので、酷使を続けた体を少しでも休ませたかった。

ふと遙か下、地上に輝く星々を見やる。それは人間たちの灯す光であった。

奴隷が、町人が、権力者が、様々な人間が空に目を奪われ
ている。彼らに私たちは見えない。見えているのは、夜闇を
照らす星の輝きだけだ。

彼らの感動、憧憬のような思いは、星への信仰となり、私
や周りにいる、星天を管理する神々に力を与えている。

私は神として生まれ、遙か雲の上にある、人には観測しえ
ぬ聖域の中で暮らしている。数多い神の中では中位に座し、
空と星への信仰を司る上位神の下についている。

この流星捕りも、成そうと思えばもつと上空で行えるもの
だ。わざわざ引きつけることで、より長く流星を輝かせて信
仰を多く集めようという目的があった。

実際、ただ燃え尽きる石ころの群れを、人々は何ともあり
がたそうに見上げていた――。

「まったく、人間たちも能天気なものッス。あいつらのため
に、神々まで出動しているというのに」

ハツと顔を上げると、すぐ隣に同僚がいた。私の方が配属
が三百年ほど早いので、こいつは私を上司扱いしてくるのだ。

私は再び視線を下に戻す。ある者は両手を組み、目を瞑り
一心に祈っていた。ある所では、子供たちが空を見上げ、星々
を指さして何かを語り合っている。

「しかし、神の奇跡も人々の信仰あつてのものだ。飛来物か
らこの星を守るなど、それこそ神の奇跡以外の何をもつてな
せるだろうか」

流星が見えなくなつたためか、人々が順に元の生活に戻っ

ていく。私たちが見捨てれば今にも星によって甚大な被害を受けるということなど、きつと思ひもしないのだろう。

「……どうやら、今日の仕事はこれで一段落だな」

気付けば現場監督の上司は見えなくなっていた。仕事中は厳しいが、帰れば二人の子を育てる優しい一家の主だそうだ。「ホントきついッス。人類の発展に併せて、星天系の信仰が伸びるって聞いたんで入柱したんすが、まさか現職の神がこんな重労働する羽目になるなんて」

季節の移り変わり、方角の確認など人類は様々な場面で空を見上げる。昼は太陽、そして夜には月と星々を。

航海技術の発展により、星の重要性は更に上がっている。

同僚の言う通り、確かに伸びている側面もあるかもしれない。

「だが……」

「センパイ、どうかしましたか？」

希望ある若者にはこんなこと言えないが、不安材料もあった。

先ほどまで見ていた地上。拓けた農村地がポツリポツリと点在している。

そこから西に目をやると、山を六つほど越えた場所に、巨大な都市が佇んでいた。

床に入った者も多い田舎と違い、その都市は今もなお活気づいている。眠らない街、と言ったところだろう。

夜闇に蠢く人々は皆、空を見上げようなどとはしない。人が生み出した明かりの技術が、闇への漠然とした恐怖と、そ

れを照らし、人を守る星への信仰を薄くしていた。

いつか世界中を明かりが埋め尽くし、星の見えない世界が来たら、その時は我々も力を失うのだろう。

もちろんそんなことは、上位の神々も重々理解しているだろうし、私ごときにはどうすることも出来ない。

人類の発展は、人口の絶対数増加に直結している。大半の神々にとつて都合のよいことに、我々だけが反対するわけにはいかないのだ。

と、長々と考え事をしてる間に、この空域にいるのは私と同僚の二人になっていた。

「なんだ、お前は帰らないのか？」

「いや、センパイ一人置いて帰るわけにもいかないッスよ。まあすぐ帰ったところで、一人寂しくお物業で晩飯ですからねー」

同僚は腰に片手を当て、もう片方の手で何かを飲むような仕草を試みせた。随分と分かりやすい誘い方だ。

「じゃあ、なんだ。私の家で晩飯食べていくか？ 酒も、少しなら」

「よっしゃー！ あ、帰りにコンビニ一寄っておつまみ買って行きましょうか」

「ん？ 何だそれは、聞いたことがないぞ」

「最近、異界に視察行つてたのがもち帰って建て始めたらしいですよ。年中無休でいつでもやってる店なんですって。便利ですね」

「それだと神件費高くつきそうだがどうなんだろう」

「その辺は詳しく知りませんが……。でも、商売神のお墨付きで始まつたらしいし、上手いくんじやないスカね」

「ふーん」

「酒とおっさんとかかんとか〜♪」

気付けばさつきまでの不安は頭の隅に追いやられていた。

「能天気さでいえば、お前も人間のこと言えないな」

「え？ 何か言つたツスカ？」

「いいや、なんでも」



酒は飲んでも呑まれるな、とはこの神の言葉であつたか。

「正直やつてられないツスカよ。こっちは小間使いの天使とは違つての」

「おい、もう飲むのはよせ」

弱いのに酒好き。最も手に負えない神種だ。何故潰れるまで飲まないと気が済まないのか、理解に苦しむ。

「それにしても、ハードなのは良いんですが、もう少し楽しみとかないんですかね」

「何の話だ？」と聞くと、「星捕りツスカ」と嘆きをふんだんに仕込んだ声音で返つてきた。

「一つ取り逃したら大惨事なのは分かつてますよ？ でも、もつと張り合いが欲しいというか……」

張り合い。そのようなことを考えたことはなかった。

「成果に応じてボーナス付くとかか？」

「それもいいですけど、もつとこう、仕事そのものにやり甲斐が湧くようなですね」

「楽しく仕事がしたいと？」

「はい、そんな感じツスカね」

「それはもう、この仕事向いてないとしたか……」

「ちよつと。諦めるの早くないツスカ？」

これが昨今話題のゆとり世代というやつか。仕事が楽しかったら不景気なんてこないだろうに。

しかし、と考えを改めてみる。単調な書類仕事ならともかく、一応体を動かす業務内容だ。改良の余地は存在するかもしれない。

「……お前、貯蓄はどれくらいある？」

「神通力ですか？ 村一つを飢饉から救えるくらいですかね」

「そうか、私は疫病に滅ばされそうな国を三回救えるくらいかな」

同僚が驚愕の表情を見せる。ただの先輩がすごい先輩に見えるくらいには効果が合ったかもしれない。

「それが本当ならセンパイ、どうしてこんな怪しい地位に収まっているんスカ？ 常識的に考えられないですよ」

地道にコツコツ貯めて、休日に残高を見てはニヤつくのが趣味だとは言わないでおこう。

「まあそれはいい。少し面白いことを考えたから耳を貸せ」

「それってもしかして……」

「ああ。お前が楽しく仕事を出来るようにしてやる」



「それで、たった二人の飲み友が始めた計画が実を結び、今やここまでの規模になった、と」

黒色の巫女装束に身を包んだ女神は答えた。

「そうだな。まあ私も内心で、現状を変えたい想いが無いこともなかった」

なるほど、と相槌を打ちながら、客は豆粒のような大きさの、様々な色がある砂糖菓子を口に含んだ。

女神と話すのは全身を黒に包んだ少年だ。茶色の鞆を背負い、身軽に動ける格好であった。

「口の中全体に優しい甘みが広がりますね。渋味のある飲み物と相性が良い」

「祭りにちなんだ菓子を、と思ひまして作らせたんだ。人間も中々いい仕事をする」

女神はずぶ、と音を立てて茶を飲む。

「ええ、是非とも繁盛させて下さい」

「私は商売に携わる神ではないから……っと、そろそろ始まりそうだな。本日のメインイベント、とくとご覧あれ」

雲で作られた特等席から望むのは、満天の星空から零れ落

ちるように降り注ぐ大量の星屑たち。

「ルールは簡単」

女神が静かに語る、しかしその声音には、少しばかりの興奮が混じっている。

「どれだけ多くの星屑を集めるか。大きさや落下速度によって様々な色にマーカーが付けられた星屑には得点が付けられていて、最も多くの点数を稼いだ者がこの祝祭の優勝者です。網で捕ったものしか得点は認められません」

誰かが高らかに笛の音を響かせる。それと共に、網を手にした大勢が空高くへ飛び出していった。

「最初は小さな祭りだった。仕事仲間で競い合う程度のお遊びに過ぎなかった。それが、今——」

網を持つのは神々だけではなかった。この世界の選ばれた人間や、他の世界から招かれた人や神、見たこともないような出で立ちの者までいた。

「人と神だけでなく、世界の垣根も越えた大祭ですか。さすが、天体の運行まで管理する、星天の最高神ならではのですね」

客はそう言いながらも、ごく普通の社交辞令に留まる態度を崩すことはない。目の前の神に対する敬意は、あくまでも偉大なことを成し遂げた者に対するものであり、人が神に見せる無条件の信奉とは異なるものだ。

女神は、そんな彼の言葉をお世辞と受け取ったのか、苦笑気味に返した。

「なに、ほんの少し出世しただけさ。相方だって、箒星の交通整理ぐらいは出来るんだが、あそこで馬鹿みたいに笛吹いてるよ」

祭りが始まってからも、笛を持った女神がリズムをとりながら吹き鳴らし続けていた。お世辞にも上手なものではないだろうが、背後の楽奏隊がカバーしていた。

「久しぶりにいい世界に来たものです。最近は、死線にばかり放り込まれている気がしまして」

「どうだい？ 一つ息抜きもしてみては。招かれざるとも、偶然このタイミングに訪れたんだ。何かの縁かもしれない」
彼は立ち上がり、一度頭上を見上げた後に振り返って否定の言葉を述べた。

「いえ、そろそろ行くこうと思います。この世界は十分に平和で、人口も十分なようだ。僕の望みは、きつとここでは叶いません」

女神はこの返答を最初から知っていたかのように、異界からの訪問者に返した。

「……そうか。では気を付けてな。君に星々の導きがあらんことを」

「ありがとうございます。星空の神様の祝福があれば、僕の前途も明るいですね」

軽く会釈した後、彼が何かを呟くと、霞んでいくように彼の姿が透けていく。

「星は世界と未来を見通す。君の行く先に待つのは……」

すべてを口にする前に、その背中が消えてなくなっていた。「世界を渡り歩く旅人か。長いこと生きているが初めて見たよ、君のような人を」

女神は空を見上げた。

何十もの様々な色に輝く星屑を背景に、何百何千の影が動き回っている。

叶えられた夢の姿を、女神はただ静かに見守っていた。

あとがき

どうも、マウスです。

自分たちを知っている人がどれだけいるのだろうか？ そもそもどれだけ需要があるのだろうか？

そんなことを考えながらも書きます。だって暇なもの。

宗教的なものとは全く関係なく、神様が好きです。強制されるのではなく、でもこちらから様付けしてしまう感じの。

あとは現人神ではありませんが、伝説的人物が死後に神の位を得るとか面白いですね。

しばらく神様ネタ引つ張りたいので、ゆるい神様過激な神様色々書いていきます。たまに超能力。

体が、焼ける……。

「なんだよこの気温……」

あつい、あついあつい。

「まだ朝なのに……チクショウ」

炎天下の中歩く。男、森崎。

早く冷房の効いた建物に入りたいんだけど、速く歩きすぎるとかえって暑くなるという前門の虎、後門の狼状態。

「なんで夏休みまっただ中に補講するかな〜」

インドア派にはキツイ。

満員電車を乗り越え、なんとか大学まで到着。

食堂に向かう。

「あああ〜アイス冷てえ」

当然の感想。

昼食というにはちょっとだけ早い時間。

授業が終わる十分前。

食堂に人が殺到する前に席をとっておく。

「冷たいの冷たいの……冷やし中華だな」

注文。

冷やし中華を受け取り席に戻ってくる頃にチャイムが鳴った。

「ちょうどいいタイミングだ」

授業が午後からのときは昼休み十分前に食堂で昼食。

前期からずっと繰り返してきたので、電車に乗る時間も把握してある。

「さて、と」

昼食終了。

食堂も混み始めている。

「自習室、行くか」

自習室。

クーラーが効いていて、勉強には最適の空間。

「今日は本来なら夏休みだからな」

誰もいない。

「スマホを触るのもいいんだけど、自習室だからなー」

「今日の実験は何やるんだろ」

「解剖か……」

魚(マアジ)の解剖。

「やったことないけど、なんとなく嫌だなあ」

実験室。

授業開始。

「さて、今日の実験は解剖です」

教授の声。

皆大学生だから不満不平は出てこない。

「えー、テキストではマアジを解剖する予定でしたが、変更します」

予定変更。

皆大学生だから不満不平は出てこない。

「ちょうど、木下君が登校中に亡くなったので、木下君を解剖します」

皆大学生だから不満不平は出てこない。

「って、ええ？」

周りを見渡す。

騒いでるのは一人だけ。

「どうしました森崎君？」

「いや、当然でしょ」

「どうして？」

「だって、人を……」

「死んでいますが？」

さも当然のように。

「いや、死んでいたって……」

「ご両親からの許可は頂いております」

「許可って言っても、倫理的に」

「光栄なことですよ」

笑顔で、疑うことなく。

「……そんな」

混乱しながらも、どうすることもできなくなり席に座った。

「えー。では、解剖に移りますが、サンプルが一つしかないなので代表の人に解剖してもらいます。誰かやりたい人はいますか？」

「……そんな人、いるわけ……」

「はい！」「はい！」「はい！」

「私がやりたいです！」「はい！」

「はい！」「俺が！」「はい！」

「嘘だろ……」

全員拳手。一人を除いて。

「やっぱりそうですか……、じゃあ公平にくじ引きで決めましょう」

「では、光栄ある解剖が出来る人は……森崎君です」

「はぁ？ オレ、やりたいなんて言って……」

「良かったですねえ」

「いいなー森崎、でもくじの結果だしなー」

「さあ、森崎君、前へ。みなさんも前に来て見ましょう」

隣の席の奴に半ば強引に連れて行かれた。

やったな。なんて言われながら。

「では、解剖ばさみを持って、この本を見本にやってみましょう」

人体解剖大辞典。

開かれたページは赤。

真っ赤。

「これを、今から、オレが……」

右を向く。

好奇の目。

左を向く。

好奇の目。

「やっぱり、オレ出来な……」

教授が肩を叩いた。

右を向く。

「やれ」

渦に、飲まれた。

無心。

機械人形のように、淡々と。

慣れてないから、不器用に。

ついさっきまで生きていたであろうそれを。

この間まで一緒に授業を受けていたこれを。

内蔵を壊さないように。

ハサミを入れ、拓く。

「意外と言っては失礼ですが、上手いですね、森崎君」

「サンプルがオンナだったら良かったのにな」

逃げた。

逃げた。

全力疾走で部屋から出る。

エレベーター？ いや、階段だ。

走る。走る。

走る。

離れるために。

あの空間から。

「ハア、ハア、なんなんだアは」

走る。

「一体……」

走る。

「何がどうなってるんだ！！！！」

走った。

電車に乗った。

がたん、ごとん。

「落ち着け、落ち着け」

電車の中は座席が全て埋まっていた。

一人だけ汗だくだから、ひどく目立つ。

目立つ。

「目立……つ」

言って、気づいた。

「おまえが、ぼくを、ころした」

全員、解剖したはずの木下君だった。

「あは、あはははは」

「右側の扉が開きます」

走った。

逃げた。

なにがなんだかわからない。

家まではまだまだ。

小休憩のために、ここに来た。

行きつけのたい焼き屋。

店員の顔を見る。

「ハア、ハア、良かった……」

たい焼きを一つ注文。

注文したはいいが、まだ、食べない。

「ハア、ハア、ハア」

息が上がってる。

こんな状態で食べられるわけがない。

それにしても、ここでは目立たない。

ここには木下君はいない。

「大丈夫、大丈夫……」

そう言って、店員の方をもう一度見た。

「あれ、あの店員、店のたい焼き食おうとして……」

ぼくの首が飛んだ。

何も見えなくなった。

「ちょっと、新人ちゃん！ 商品勝手に食べちゃ駄目だよ！」

「いやあ、このたい焼き朝からずっと並んでて、しなしなになってましたから」

「食べるんなら裏方で食べる！」

「はーい」

男、森崎は死せり。

否、そのような人間など最初から存在しなかった。

全ては幻想、妄想である。

ぼく、すなわちたい焼きの空想でしかない。

さて、ここで疑問が生じる。

ぼくは死んだ。あの能天気新人バイトに頭から食べられて死んだ。

なのに、今、こうして語っている。

何故？

事実として存在しているたい焼き。それは森崎の行きつけ店に存在しているたい焼きのようなたい焼きだ。たい焼きくがある>という意味で存在しているたい焼き。

対し、「たい焼きは鯛の形をしたお菓子くである>」という意味でもたい焼きは存在している。

前者の事実存在としてのたい焼きは一つ一つ独立しているが、後者の本質存在としてのたい焼きは世界にたった一つだけだ。

いや、世界がたい焼きのアイデア一つだけだと言ったほうが正しいか。

たい焼き、それは観測者。世界を成立させているのはたい焼きである。

まあ、簡単に言うと個々のたい焼きの思想はリンクしていてネットワークを形成している。

つまり、君が食べたことのある億千万のたい焼き。それはすべて同じものだということだ。

たい焼きは思想を持つと言われてショックだったかもしれない。

思想を持つものを食べて良いのかと思うのかもしれない。

安心し給え。たい焼きとはそういうものだ。

食われて一つのたい焼きは消滅する。が、実は消えてない。

何故ならば、たい焼きは一つだけだからだ。

世界中の何億、何兆のたい焼き。それらを全て焼き殺し(たい焼きは焼かれて生まれてくるんだよなあ)としても無駄だ。決して消滅などしない。

たい焼きの本質は実際の世界に依存しないからだ。

実際の世界などという滑稽極まりない表現を使ってしまったな。

先も言ったとおり、たい焼きが世界に存在するのではない。

世界がたい焼きに存在するのだ。

たい焼きは沈黙するが、作り続けなければならない。

おわり。

あとがき(何言ってんだコイツ版)

身も蓋もない事を言いますが、「たい焼き」というところには何を入れてもいいと思います。その他のお菓子でも、生物でも、無機物でも。「神」でも。

この世にはいろんな神様がいます。日本の八百万の神、キリスト教的神、インドの神……。民族には固有の神がいます。しかし、それらの本質は同じであるという考え方があります。富士山は見る場所によって違って見える。神様についても同じことが言える。日本から見れば日本の神様が、インドから見ればインドの神様が。その本質は「超越的実在」。(要するに、人には到達できないスゲーやつです)

私たちが見ている神は超越的実在の一つの現れである。なんともろまんていくな考え方ですなあ。

超越的実在としてのたい焼きが見る世界は世界そのものですが、事実存在のたい焼きが見る世界は空虚な妄想なのでしょうか。「たい焼き Twinkle☆Star」で描かれた森崎という男が見た世界は幻想でした。

たい焼きを食べると、(そのたい焼きが見た)世界は終わる。終わった世界は認識不可。終わるということを知ることが出来ないのであれば、始まりなど無いに等しい。つまり、終わった世界は初めから存在しないのです。

果たして私たちが生きている世界はどうなのでしょうか。もしかしたら、あなたが手に持っているたい焼き、それを食べたら終わる世界かもしれません。

そんなものがないと言い切れるのか。そうかもしれないし、そうではないかもしれない。その議論に興味があるのかどうかもわからない。

全ては超越的実在たい焼きの掌の上で……。しかし、たい焼きは語らない。

ここで私たちに要求される態度は一つ。

たい焼きを作り続けること。

「たい焼きは沈黙するが、作り続けなければならない」

あとがき(黒歴史は繰り返す、一年後に見て赤面する版)

何故、私たちは勉強するのか。それは、勉強してしまったから。勉強するということは疑うということ。疑うことを覚えてしまったら疑うこと以外は出来なくなる。「何故私たちは存在しているの」「そもそも存在って何?」「世界って何?」「時間は何?」……。一度、懐疑の道に入ってしまったが最後、動くことは出来なくなる。許されるのは懐疑のみ。そうして、疑いまくった結果「我思う故に我あり」なんて思想が出てくるらしいですけど、「我思う」と誰かが思っただけかもしれない。その誰かは、とりあえず、私ではないですなあ。

今のヒカルはこんな状況。勉強してしまったが故に、勉強しなければならない。そして、それを心地良いと思ってしまう自分がある。最初に勉強する原因を作ってしまった、大学の某一般教養講義と某哲学的ゲームには敬意を。(偉そうに言っておいてなんですが、ヒカルは哲学者になれるほど頭は良くないです。愛読書は「純粹理性批判」とか言ってみてえなあ。まあ、ドイツ語読めないんですけどね)

こうして、黒歴史が増えていくのであった。来年の今頃は心理学とかについて語っていると思います。

ヒカルです。文体がえらくモデル
チェンジしてますね。どうして
こうなった。内容は、そうですね。
前半は置いておいて、後半は大学
の授業で学んだ事を使おうと思っ
たらこんなことになりました。

まあ、そんな所です。

最低限の光ファーストプロジェクト
月刊誌「SAHIKA」読んでいただき
ありがとうございました。

どうもどうも。

T.Kでございます。

この冊子をここまで
読む貴方は報道部員
ですか？

そうでなければ

次号もきっとある

のでよろしくをお願いします。

今回は原稿を書きつつフロムも作成しましたが、

写真を加工したので初のカラーです。

おそらく気づく方はほとんどいないと
思うので書いておくと、この写真は
高校の旧報道部室から撮られた物です。
それを発掘したのでちゃちゃちゃっと
思ひ出っばくしました。新たな旅路は
これまでの思い出を糧に始まるのです。
ではまた。

どうも、マウスです。あとがき
ですら無理に絞ったのに書くこと
もうないヨ。200字分適当に
のたまえばいいかな。

「良く」あることと、「悪く」
あること。悪くあるのは我慢する
ことも、努力することもなくその他
大勢から自分を逃がすことが出来る
のです。だから人は、時に自尊心の為に
悪に手を出す。「間違っているのに」
ではなく「間違っているから」。

人と違う自分に
酔いたいんだ。

けれど、

その他大勢と
一緒に嫌、という
考え方が既にその他
大勢なんですよね。
勿論、そう聞いて
「その他大勢
もいいよね」

とか言っても変わりません。

難しいですね、特別って。

こんばんは。表紙の鬼です。嘘です。
欠伸と眠気は春の友。瞬き一つ二つで
揺らぐ景色から逃げだし浅瀬に漂う
我身なのです。あーねむい。一体
ここから何が目覚めるか、
楽しみです。 鴉和